

平成 19 年度日本海ソデイカ(あかいか)漁況情報(中短期予報)

* 但馬地域の沿岸漁業にとって重要な対象種となっている「ソデイカ(あかいか)」について、現況と中短期的な漁況予報を公表します。少しでも操業の参考になれば幸いです。

現況と見通し(予報対象期間:平成 19 年 10~11 月)

【現況】

- ・ 漁況指標値(香住本所の 1 日 1 隻あたり漁獲量)は 51~78kg と昨年を上回って推移。
- ・ 漁獲物は胴の長さが 60~65cm(8~10kg)のものが主体。
- ・ 但馬沖西部(鳥取沖)の 100m 深に冷水域があり、東部(丹後沖)に好漁場が広がる。

【今後の漁況予報】

- ・ 漁獲物は別の群(9 月末で胴長 40~45cm)が主体となる。
- ・ 好漁場の範囲は、10 月に縮小する(沿岸寄りに狭くなる)。

* 日本海西部海域の海況予測には、「九州大学応用力学研究所」の日本海海況予測システムを利用しました。
(<http://oops.riam.kyushu-u.ac.jp/vwp/>)

1. 漁況の推移(図1)

今漁期は例年より数週間早く、7 月末頃から漁獲がはじまりました。漁模様の指標としている但馬漁協香住本所の 1 日 1 隻あたり漁獲量の旬別平均値は、8 月中旬以降、51~78kg/日/隻で推移しており、昨年を上回っています。

一方で、しろいか(ケンサキイカ)の来遊量が昨年より多いことや、漁場がやや沖合を中心に形成されていることから、小型の漁船による漁獲がやや少なくなっている漁協(支所)もあるようです。

2. 漁獲物体長組成の推移(図2)

但馬漁協香住本所での市場調査の結果では、漁期開始時より大型のイカが多く、9 月以降は胴の長さ(外套長)が 60~65cm(体重では 8~10kg)の大型ものが漁獲の主体となっています。(図 2 の赤い曲線で示した群)

また、9 月中旬頃からは、胴の長さが 40~45cm の別の群(青い曲線)も漁獲加入してきました。今後は、こちらの群が成長しながら漁獲の中心となってくるものと考えられます。

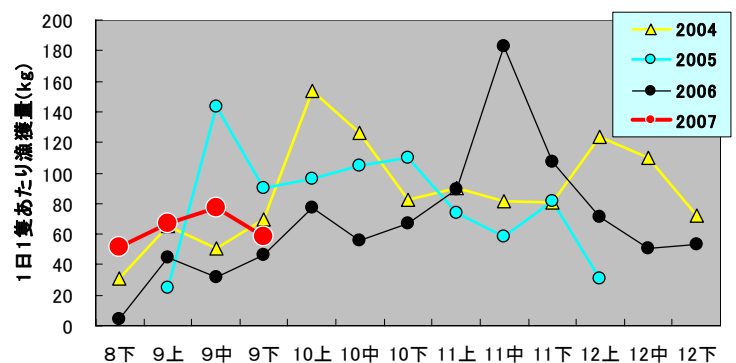


図1. 1日1隻あたり漁獲量(但馬漁協香住本所)

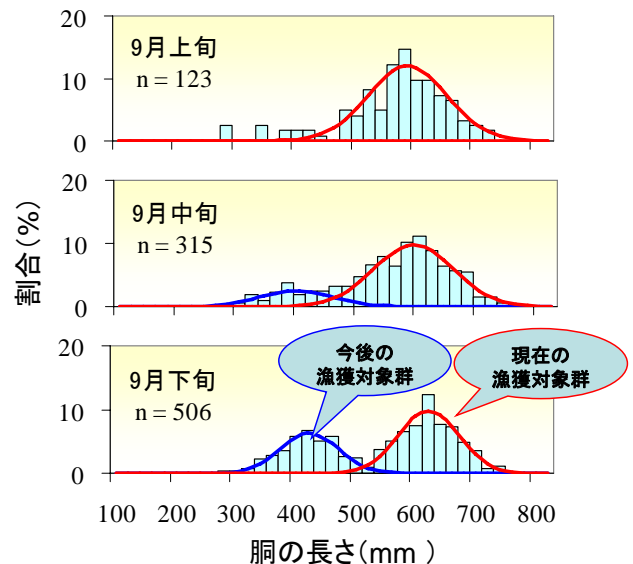


図2. 漁獲物の体長(胴長)組成

3. 漁場環境の推移 (図3)

これまでの研究により、**好漁場は水深50mの水温が19℃以上、水深100mの水温が14-15℃以上の海域に形成される**ことが分かっています。また、この時期の山陰沖漁場の水温は、季節的な変動よりも沖合部に出現する冷水域の動きに大きく影響されています。

今漁期の100m深の水温の変化を「日本海海況予報モデル」により予測してみました(右図)。それぞれ黒い太線が水温15℃を示しており、太い線よりも沿岸側が「好漁場」となる可能性のある海域です。

9月末の山陰沖100m深の水温図では、西部海域に冷水域が張り出ししており、鳥取沖で低水温、丹後半島沖で高水温となっています。つまり、**東寄りの海域ほど好漁場の条件を満たしている**状態です。

10月中旬にかけてこの冷水域はやや南東方向に拡大すると予想され、**但馬北方の漁場範囲はやや沿岸寄りに収束する(狭くなる)**と考えられます。

11月上旬になると、冷水域は北西方向に縮小すると予想されていますので、**好漁場の範囲は沖合部にまで拡大する可能性**があります。

4. その他

気象庁の3ヶ月予報では、日本海沿岸各府県の気温は平年よりも高い可能性が高いと予想されています。また、日本海区水産研究所の予想では、対馬暖流域の表面水温は「やや高め」、50m深の水温は「平年並み(日本海西部)」または「やや高め(日本海北部)」で推移すると予想されています。海況的には特段の特異的な条件は発生しないものと考えられます。

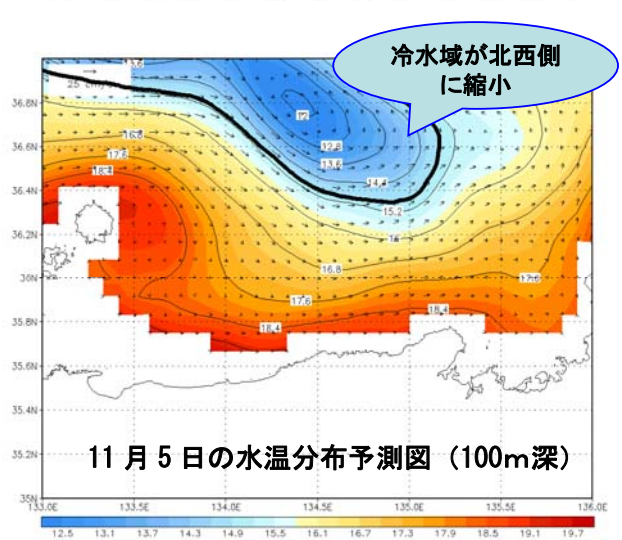
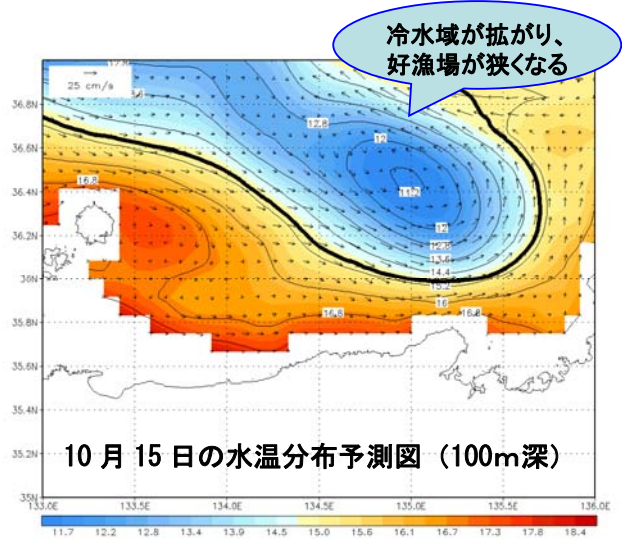
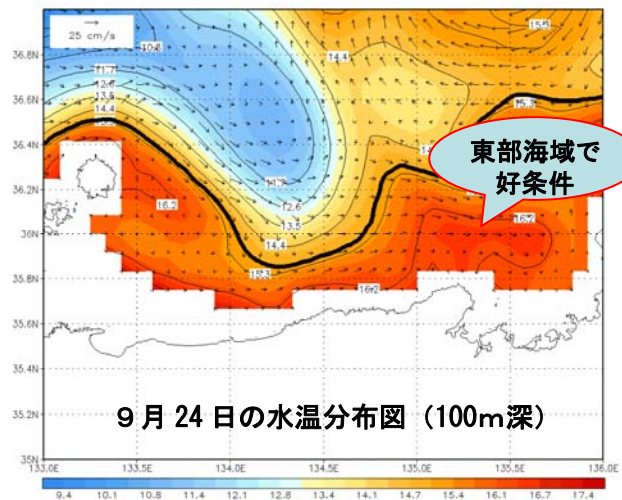


図3. 今後の漁場水温(100m)の推移の予測